

論文要旨

南九州における狩猟実態  
―鳥獣供養に関する民族誌的考察

本論文は、熊本県球磨郡多良木町そしてその近辺で行った参与観察を意味する文化人類学的なフィールドワークで得られたデータをもとに、駆除・狩猟の活動、そして、それらに相反する鳥獣供養という実践を取り上げ分析することで、現代日本における猟師と野生動物との関係に関する人類学的理解を深化させるための民族誌である。

近年、人類学的な研究領域においては、人間と他種の絡みあいから人間とは何かを再考するというマルチスピーシーズ民族誌が注目されている。本論文では、人間と動物との関係をめぐり、先進国と言われている日本社会における狩猟実態の「鳥獣供養」という実践に注目し、それを実践する当事者の視線から、人間と動物の関係をめぐるこれまでの議論の有効性を取り直そうとする。

従来の狩猟文化に関する領域において、人間と動物の関係は近代以前と近代以後に分けて論じられてきた。一方、近代以前には人々は自然の豊かな恵みに感謝し、大災害をもたらす荒ぶる自然を怖れてきた。アニミズム的な考えのもと、動物と人間は自然の一部であり、水平的な関係であったとされている。動物は死後に霊的な存在になることで、人間にとって怖れの対象になる。他方、近代以後には、様々な分業化が進み、動物を資源化・商品化されることで、それまでの構造が激変した、と指摘されてきた。生業を支える動物に対する感謝はあれども、動物への怖れがなくなったとされる。

こうした研究蓄積との関連で、本論文では3つのことを明らかにする。まず、近代以後、人間と動物の関係は上下関係になったとされているが、実際今においてもイノシシには銃を使い、シカを棍棒で仕留めるなど、猟師と動物の関係は水平的に維持されている点を明らかにする。次に、従来の研究では猟師は「感謝」の気持ちで慰霊碑を建立しているとされているが、本論では「悪いことが起こらない」ためにしたという「怖れ」の側面を指摘する。さらに、狩猟肉は商品とみなされ、肉になってもらった動物に対する感謝だとされるが、本研究で、それは動物に対する感謝というより、山の恵みに対する感謝であることをあらわにし、狩猟実態において近代以前と以後の連続性を指摘した。

こうした調査に基づき、かつ狩猟免許証を取得し、実践的に関わりながら、ミクロな視点から「鳥獣供養」の実践を通じて、生きている動物と人間、死んでいる動物と人間、また、山の神と人間の関係、すなわち、自然と人間の間を再検討した。